

M.T. 日本語日本文学科 2016年度生

I. 留学レポート

① 大学院入学前の日本語教育の実践経験

同志社女子大学では日本語日本文学科で日本語教育を専攻していたので、授業の一環として模擬授業をすることが多くありました。他に、ボランティアとして初級から上級レベルまで、幅広いレベルの授業アシスタントの経験があります。また、アルバイトで英語を母語とする社会人に日本語レッスンを約2年間実施した経験があります。ここでは教材も自ら作成し教えていました。Castleton Universityで教える際、この時に作成した資料に少し変更を加えて使用することもあり、とても役に立ちました。これらは全て日本語で日本語を教える経験でしたが、英語で日本語を教える経験として、オーストラリアのセカンドリースクールで1ヶ月間TAの経験もありました。Castleton Universityで教えるときは英語で教えていたので、英語で日本語を教える日本語教育の実践経験は、オーストラリアでTAをした時に学んだ先生方の教え方が参考になりました。

② 参加決定から出発までの準備期間

日本語教育を専攻し、日本語教員養成課程を修了しました。一方英語に関しては、在学中からIELTSのスコア取得のための勉強を中心にしました。

③ 出願決定から出発までの準備期間

大学院への出願の際は、同志社女子大学の国際課と連絡をとりつつ、基本的にはキャスルトン大学の担当者とメールでやり取りをしました。出願をオンラインで完了し、航空券は自分で手配しました。空港からキャンパスまでは大学の送迎サービスを利用しました。コロナ禍での渡航だったので、陰性証明書などを追加で取得する必要があり、大変でした。

④ 大学院での専攻

Master of Arts in Education: Curriculum and Instruction

⑤ 経験したこと

各 Semester 3つのコースを履修していました。Semesterごとに必修のコースがあったので、残りの2つは選択科目として教育や心理学分野のコースを履修していました。また、independent study といって教授と相談しながらより自分のしたいことを学ぶことで単位を修得する制度もあり、independent studyで修士論文とは別の研究をして論文を執筆していました。論文のテーマは、高等教育における学習障害やセクシャルマイノリティ、人種的マイノリティへの支援をテーマに調査・研究をしました。授業1コマは約3時間で途中休憩はあるものの、とても長かったです。どのコースも課題の量が多く、毎週 Reading がありました。授業はディスカッションベースなので、自分の意見をあらかじめ用意し、必ず発言できるようにしてから授業を受けました。大学院の授業は、オンラインで開講されているものもあり、留学生はビザの関係上オンラインで受講可能な単位数が決まっている点が、履修を組む上での注意点でした。2年目になると、修士論文の執筆が本格化しました。2年目の Fall Semesterで、テーマを決めて修士論文の約半分を執筆しました。最後の Semesterで、調査とデータ分析を行い、results と discussion パートを書き上げて修了しました。他の修士課程の学生は、2年で修了せず3年かける人も多く、修了時期が人によって異なりました。そのため修論のペースなども個々人で異なり、柔軟性が高いと感じました。

⑥ 修士論文のテーマと簡単な概要

日本語学習者の学習を通しての動機づけを把握し、授業で可能な指導の選択肢を探ることを目的に、日本語学習者のモチベーションをテーマに決めました。大学で開講されている初級レベルの日本語コースにおいて、学生の動機付け要因を質的調査と量的調査の両方を用いる Mixed-Methods を使用し、学生の日本語学習意欲に影響を与える変数を調査しました。その結果、学生は日本語母語話者との交流に限らず社会的相互作用をモチベーションとし、フラストレーションをモチベーション低下要因とする傾向があり、日本語の文字をモチベーションとモチベーション低下要因の両方として持っていることなどがわかりました。最後に、日本語学習への動機付けに影響を与える要因や、生徒の動機付けに役立つ方法を発見することは、日本語教師が指導や動機付けの選択を改善することに寄与することを提言しました。

⑦ 経験したこと (TA 関連)

日本語のティーチングアシスタント (TA) は、1年目の Spring セメスターから開始しました。1年目は Intro to Japanese という入門のコースを、2年目はそれに加えて Intermediate Japanese という入門の次のレベルのコースの2つを担当し、毎日日本語を教えていました。ティーチングアシスタントという立場ではありましたが、日本語の教授はおらず Castleton University で日本語の授業が過去に開講されたこともなかったので、シラバス作成から教材作成、学生の提出物採点など、日本語の授業にかかわる業務は全てこなす必要がありました。日本から持参した「みんなの日本語」の教科書をもとにシラバスを作成し、授業は全て自作のハンドアウトを使用して教えていました。履修者数はセメスターによって違いましたが、大体6～10名以上の学生が履修していました。受講生によっては課題や試験を受けない学生もいて、そういった学生に指導することが最も苦勞しました。また、授業に関してアメリカのしきたりに従えるように、自分自身を適応させることも必要だと感じました。

⑧ 寮生活

TA をしていたので、寮ではシングルルームに住むことができました。そのためルームメイトもスイートメイトもない完全に自分一人の空間を持つことができました。

⑨ 長期休暇の過ごし方

1年目と2年目の間に約3ヶ月の夏休みがあり、その時期は一時帰国をしました。そのほかの休暇は、旅行に行くことが多く、東海岸だけではなく西海岸やカナダまで足を伸ばしたりしました。Castleton University はセメスター中に2回一週間の休みがあり、その休みは旅行をしたり、寮に残ってリラックスしていました。

⑩ 生活面 (アカデミック)

とにかく課題が多く、全てこなすことが大変でした。課題だけでなく、日本語の授業準備もするので、タイムマネジメントの力が身についたと思います。Castleton University の教授や職員、学生は皆親切で親しみやすい人が多かったです。そのため Office Hour の利用もしやすく、授業の雰囲気も良くて居心地がよかったです。

⑪ 生活面 (私生活)

日本とアメリカの文化的な生活の違いよりも、自分の出身地との土地柄の違いの方が苦勞しました。バーモント州はとて田舎で、大学のある Castleton は数店舗しか飲食店がない小さな町です。隣町の Rutland はもう少し栄えてはいますが、娯楽施設はなくスーパーやカフェ、服や雑貨店が数店舗あるのみ

2021年～2023年

Castleton University 大学院

でした。必要なものはオンラインショッピングを利用したり、日本から送ってもらったりして大抵手に入れることができました。大学主催のイベントが多くあり、キャンパスで開催されるものから NYC やボストン日帰り旅行まで様々あり、それらに参加することで楽しむことができました。

II. 将来の目標

今後の就職活動等の予定・計画について

帰国後しばらく経ってから就職活動予定です。

III. 写真



修了式の写真



キャンパスの写真

冬



秋